
白と黒の魔術師

アヴァンシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の魔術師

【Nコード】

N3937U

【作者名】

アヴァンシア

【あらすじ】

オタクだった少年が神様の気まぐれでネギまの世界に転生。
もちろんチートで行くでしょ！！ってことでFate/EXTRA
のアリスの能力をもらって原作に入っていく。

プロローグ

「ごめんね!」

私の前で少女が手を合わせて謝っている。

「って!ここドコだよ!」

思考が追いつかない頭で全力で考える。

さっきまで私はパソコンの前にいたはずだ。

そして、段々眠たくなってきた気付いたら10才くらいの可愛い少女に謝られていた。

「はい!?なぜ?どうして?」

「あわわっ!落ち着いてください!」

「こんな時に落ち着いてられるか!」

私は叫びながら、やっぱり落ち着いた方がいいかなと思いながら調子に乗ってみた。

「すいません!すいません!勝手に連れてきてしまつて!」

「別に大丈夫だ帰してくればな」

すると少女はもじもじし始め、戸惑いながら告げた。

「あの世界には帰れません。ここは天国ですから」

それから10分後

「まあいいか。」

「えっ、いいんですか?では、さようなら」

「待てよ」

走り去ろうとする少女を抱きかかえる。

「まさか、人を殺しておいてタダで済むと思ってるのか?」

「私にどうしろと!?」

少女は脅えながらこたえた。

「私を生きかえらせろ!」

「無理ですよー！もうあの世界には帰れません。」

あの世界？俺はその言葉に疑問を抱いた。

「他の世界になら大丈夫なのか？」

「それなら可能ですけど」

私は元の世界でやりたいこともないから少女に話を持ちかけた。

「私をネギま！の世界にトリップさせる！勿論能力もくれるよね？」

（笑）

「うー、貴方を殺してしまったのは私の責任ですし…仕方ありません。願いを三つ言っして下さい」

ここが肝心だな

うん。

決まった！

「まずは、この頃ハマってた fate / EX のアリスの容姿と能力、二つ目は無限の魔力、三つ目はアリスをサーヴァントとして欲しい
！！」

悩んだがこれにした。

アリスの固有結界は地味に強いしアリスは可愛すぎるから仕方ない
（笑）。

「分かりました。貴方がトリップする時に付けておきます。時代や場所はどうしますか？」お！決めれるのか
ならこれだな

「魔法世界の大戦時代のラカンが入る前の紅き翼の出てくる戦場に送ってくれ」

「分かりました。今から送ります。

新しい人生を楽しんで下さい。

とりあえず不老にしておいたので」

お！気前いいな

そして下に穴が開いたと思ったら私は落ちた。

一話

side???

魔法世界の戦場に近い森の中

戦いの音が響くその森の木に背中を預けるようにして「ありす」は眠っていた。

「うゝん、ここは何処？」

「ここは魔法世界の戦場に近い森の中よ。」

隣に目を向けるとそこには黒いゴスロリの服を着た少女がたっていた。

ぶつちやけアリスでした。ありがとうございます！

「そつか、わたし死んじやったんだ…」

「そう、そして『わたし』はまたこの『わたし』を呼んでくれたの」

「そう、わたしがアリスを呼んだの、これから先、わたしといっしょに居てくれる？わたしはアリスのありすじゃないけど…それでもアリスといっしょに居たいよ。」

「なに言ってるの？たしかに今の『わたし』はありすじゃないけどわたしを、このわたしを呼んでくれた。ナーサリーライムなんて物語なんかじゃなくてアリスとしてのわたしを呼んでくれた。ほんものになれなかったわたしを…」

そう言うときアリスは少し悲しげな表情を見せた。

だからわたしは言ったんだ、ほんものなんかじゃなくてアリスがアリスで居るように

「わたしがアリスを呼んだのはありすじゃなくてアリスなの！他の誰でもないアリスなの！前の『私』は何処かの正義の味方みたいに誰かを救いたいなんて思ってた。独りぼっちだった私は自分の存在意義を見つけたかったのかもしれない、だから救いたいって思った。

私といっしょで独りぼっちだったアリスを、偽善かもしれないでもゲームの中で消えていくアリスを見てどうしようもなく救いたくなつたんだ。」

「でも、わたしはありすにはなれないの。ニセモノだから……」

「アリスはアリスだよ、他の誰でもない『ほんもの』のアリスだよ！」

「わたしがほんもの？」

アリスはびっくりした顔でわたしの顔をみた。

「そうだよ！アリスはアリスしかないんだかこれからもほんものなんだよ。ありすの鏡なんかじゃなくてアリスなんだよ！」

自分でも何を言ってるのか分からなかった。ただただこの小さな女の子に悲しい表情をしてほしくて

「わたしはわたししかない……。ならありすやありすにソックリなわたしはなんなの？」

私はこの子を幸せにするんだと

「きまつてるでしょう！家族だよ……」

泣きながらアリスはわたしに抱きついて

「ありがとう。」

そうつぶやいた。

わたしはアリスを抱きしめながら誓いを声に出した。

「大丈夫。わたしはアリスの家族だから、ずっといっしょだから、わたしといっしょに幸せになる？」

そのあとアリスは泣きにないた。これまでの不幸の分と今の幸せの涙を。

後になって気がついたのだがこれって告白みたいだね、と他人事みたいに思った

そのあとアリスは冷静になったのかわたしからさっと顔を真っ赤にしながらアリスがはなれた。

そしてわたしは言ったんだ。

「そうよ。あたしはあたしだければいいの。だってあたしはあたしだけのあたしだもの。」

ありすの言葉を借りてわたしの思いを

そしたらやっぱり顔を真っ赤にしてアリスが言った。

「もちろんじゃない！わたしはわたしだけのわたしなんだから！！」
こんどはとびっきりの笑顔で

「そういえばさっき魔法世界って言ってたけどアリスってここ（ネギま）の知識ってあるの？」

「そのことなんだけど世界のバックアップを受けているみたいなの、だからこの世界の常識とかはあるんだけど原作の知識はないわ」

「そう、ネギまの知識自体はないのね。でもなんで世界からバックアップを受けてるのかな？わたしが無限の魔力を頼んだからかな？」
「多分そうね、魔力もありすといった時みたいな感じだから」

「よかった。でもわたしはどうなんだろ？わたしは魔力？みたいなものをアリスから感じるよ？」

「わたしはわたしなんだから繋がっているのは当たり前でしょ。これじゃあサーヴァントとマスターの関係が逆だけだね」

「そうだね、でも関係ないよ。わたしとわたしは一心同体なんだから」

「そうね、もうわたしとわたしは一心同体なんだから、絶対に離れないんだから」

そう言っただけでわたし達は笑いあった。

「そうだ、これからどうするの？あてでもあるの？」

「うん。帝国のお姫様に頼ろうと思うの」

「わたしはそれでいいわ、アナタがマスターなんだから。でも具体的にはどうするの？」

確かにそこが問題だけどちゃんと考えてある。

「少し聞くんだけどアリスって魔力を普通の人みたい遮断できる？」

「できるけど…そういうこと？帝国のお姫様ってそこまで甘いのもそれではいけないのなら簡単でいいわね」

「でしょ！でもまずはこの現状をどうにかしないと」

「そうね。うるさい音を消さないよね」

ここからでも聞こえる争いの音。

銃や魔法、そして大砲の音。

「なら二人でやろう？力を合わせて」

「わたしとわたしは一心同体なんだから」

そこでふと気づいた、自分の呼び方をきめてなかったのだ。

「アリス、今更だけど私のことは『ありす』って呼んで。私達是一心同体なんだから名前もいっしょだよ。」

「分かったわ、ありす、でいいのよね？」

「そうだよ！ありがと、アリス。じゃあ気を取り戻して広げよう？私達の世界を」

「そうね、合わせましょう、私達の心を」

「「ここでは、鳥はただの鳥。」」

「「ここでは、人はただの人。」」

「「固有結界『名無しの森』！！」」

side 一般兵

それは突然のことだった近くの森から在りえない程の魔力を感じたと思うとそれは一瞬で世界を変えてしまった。

それは比喻ではなく文字どおり世界を変えてしまった。
魔法学校にも通ったことのある俺だがこんな魔法は聞いたことがなかった。

世界が上書きされるような、まるで違う世界にでも来たかのような
そしてこの世界に入った瞬間から肌の焼けるような痛みを感じた。
ソレと同時に俺の中の魔力が減っていくのを感じた。

逃げなければならぬ、そう体中から警告が出ている。

なら何処に逃げる？無論家に、

あれ？家は何処だった？思い出せない…

何故逃げなければならぬ？分からない…

そもそもお・れは・・・だれ・・・だ・・・？

そこで完全に体がなくなるのをかんじた

side ありす

固有結界『名無しの森』が発動した瞬間、世界が塗り替えられる
ていくことを目の当たりにした。

見渡す限りの青い空を瞬く間に真っ白に変えていく。

ここではみんな平等。アナタとかオマエとか、ヤマダさんとかス
ズキさんとか、いちいち付けた名前なんて、みんな思い出せなくな
る。それだけじゃない。だんだん、自分が誰だか分からなくなっ
ていつて最後には人という存在もなくなってしまう。自我を薄めるこ
とで存在を消す固有結界。

『名無しの森』

これだけの奇跡を本来は世界が許さない。そこで世界からの抑止力
が働くのだ、魔術師はその抑止力に対抗するために膨大な魔力を消
費し続けているため普通の人間であれば数分とこの術は持たない。
普通ならば。

これを扱っているのはアリスで、そしてアリス自身は世界からのバ

ツクアップを受けている身。バックアップを受けているということは世界そのものと同意であるに等しい。

世界そのものが世界を変えるのだからそこに矛盾は生じず抑止力は働かない。

よって膨大な魔力を消費することなく固有結界という大魔術を維持できるということだ。

だが固有結界は術者の心情風景を具現化する魔術なのだ。だから私たちは一人では発動させることができない。一心同体なのだから心も二人で一つ。ありすだけでもアリスだけでも実現しない。半分だけの心で心情風景を写し出せるわけがない。そこが私たちのデメリツトであり、誓いの証でもある。

私が固有結界という魔術に見ほれている間に周りの音が止んでいた。

「ありす！ここに大きな魔力を持った魔術師が三人ものすごいスピードでやってきているわ。どうしましょうか？」

この時代・場所で魔力の大きい人物には心当たりがあった。それ以外だったのならいやだが

「たぶんそれは紅い翼のメンバーだよ。」

「どうするの？まっすぐこっちに向かって来ているようだけれど」
さて困ったことになった。

ここで紅き翼を殺してしまうと原作が早々に壊れてしまう。それは避けなければいけない、何故ならここでナギ達に死なれてはネギすらいないネギマが始まってしまう。本来はテンプレ転生の場合にもっとも大きいメリツトは原作を知っているという未来視にも似た知識だ。だがここで原作を壊してしまうとこのメリツトが役に立たなくなることをさしている。

そして私達は帝国側に付こうと考えているのだからここでナギ達に見つかってしまえば今後の行動が難しくなってしまう。ならどうす

るかと問われれば私達に代わるものを犯人に仕立て上げてしまえばいいのだ。

「アリス、ここは私達の”あの子”に囚になってもらいましょう？」
そう正体不明で消息不明、架空の巨人

「そうね、ジャバウオックならあのくらいなら渡り合えるはずだし私達をうまく隠してくれるわ」

アリスもこの意見に賛成のようだ。

さあ

「あの子」を呼ぶとしましょう？

うん、それがいいよ。

そう言つて、

私達はその手を振り上げる。
すると

何もなかったそこに巨人が現れた。

背中に羽があり、全身は赤く、その皮膚にはルーンの様な紫のラインが入っている。

大地が、空が鳴動する。

規格外の力の出現に、

自分だけでなく、空間すら震えていた。

この子が、わたしのお友達。

「じゃあ私達はヘラス帝国に行きましょうか」

「後はよろしくね、ジャバウオック？」

まだ物語は始まったばかりだ。

sideナギ

よう。俺はナギ・スプリングフィールド最強無敵の魔法使いだ。
数年前から旧世界から魔法世界に拠点を移して活動している。

旧世界から移住してきた新しい民によって形成された北の連合《メセンブリーナ連合》と、先住の獣人ら古き民によって形成された南の帝国《ヘラス帝国》は、長い間共存して上手く折り合いをつけていた。

だが、連合と帝国の関係がキナ臭くなったかと思うと、突然戦争をおつ始め出した。

些細な誤解から始まった争いが魔法世界を南北に二分する大戦に発展し、世界中の魔法使いが戦争に駆り出された。

俺達『紅き翼』も連合側につき、戦争に参加している。

ついさつき帝国側と衝突してるって通信が入って救援に向かっている途中なんだが、どうもいきなり通信が途絶えたらしい。

アルと詠春も急いだ方がいって言うてることだし、大至急そこに駆けつけた。

だが、戦闘は既に終わっていた。

「おいおい、どうなってるやがる……」

どっちが勝ったとか負けたとか、そういうんじゃねえ。全滅。連合も帝国も関係なく、そこには戦いの傷跡を残して誰もいなくなっていた。

「なに、が……起こった……？」

呆然としながら詠春が呟く。そりゃそうだ。どっちかが全滅して消えるならまだ分かる。だが、両方ってのはどういうことだよ。

「……転移、でしょうか」

アルが神妙な顔で推察する。

転移。確かにそれが一番しっくりくる。だが、転移なら中には避けるまたはレジスト出来る奴もいるだろう。

だいたい、転移でここまでできる魔法使いなんてとくに名が知られているハズだ。だが連合にも帝国にもそんな奴はいねえ。

（あるいは、まったく別の勢力か……？）

「おい、ナギ！あそこに何かいるぞ！」

思考を中断して詠春が指差した先を見ると、そこには赤い色の悪魔のような怪物がいた。

全身の感覚が警報を鳴らす。

逃げろ……！

アレは、触れてはいけない害敵だ……！

冗談じゃない。

あんなものを相手にして、無事で済むはずがない。

ここは、一時撤退するのが正解だ。

「ナギ、逃げますよ…アレの怪物相手に無事では済まないでしょう。

ここは一時撤退した方がいい」

アルの驚愕に染まった声で意識が急速に戻ってくる。

「あ、ああ。アレ相手は確かにキツイ、一時撤退する。」

皆に確認を取り、詠春が頷いたのを見た。

そうと決まれば話は早い。

三人で全力でこの場から逃げ出す事にした。

と、背後から、

ケモノの咆哮の様な声が聞こえた。

「……………！」

俺達はそれを聞きさらにスピードを上げてその場から逃げ出した。戦場から十分離れた位置で休憩した。全力で逃げてきたので、息が上がっている。加えて、先ほどの不可解な出来事で、未だに頭が混乱している。

戦場に誰もいない……とは一体どうなっている？そして、凶悪な

気配の怪物。あれこそが事件の犯人なのだろうか

「あれほどの凶悪な殺気……これは少々厄介かもしれません。」

一息ついたアルがため息をもらした。

もしあの怪物が犯人だとすれば対策もなしに近づくのは危険だろう。

「あの怪物は強い、たぶん俺達『紅い翼』でも本気でいかないと無事じゃすまないくらいに」

「そうだな、ナギ帰ったらゼクスに聞いてくれ。あの怪物がなんなのかを……」

アルの言うことは間違いない。俺は奴を見た瞬間背筋が凍ったかと思う程の殺気を感じた。

今の俺達ではアレには敵わない。

「詠春分かった、あとでお師匠に聞いておく。」

早くあの怪物の対策を立てないと

でも、まずは安全なアジトに帰るとするか。

二話

side ありす

私達は今、ヘラス帝国に来ている。

私達がどうやってここまで来たのかって？

それはあれだ、アリスの転移魔術を使ったのだ。

これは魔術の中では大魔術の部類にあたるのだが私のサーヴァントのアリスはこれを高速詠唱によって5秒もかからずやってのけてしまった。

それを私は「アリスはすごいなー」と見ていただけであっただが。

それはともかく私達はヘラス帝国に来た。

目的はテオドラ第三皇女にあつて保護してもらつたためだ。

テオドラなら難民のふりをすればかくまってもらえるだろうと思つたからだ。

あの子はまだ子供で人が困っていると無条件で助けてくれるだろう。

テオドラを探していた私達はヘラス帝国の中央で探索魔術を使い位置を確認した。

これが普通の魔術師や魔法使いなら魔術を使ったのがばれてお縄を頂戴することになるのだろうが魔術を使ったのはアリスであり、アリスは聖杯戦争でキャスターに選ばれたほどの魔術師だ。

魔力の隠蔽を完璧に行っていたのでまず見つからないだろう。

どうやら探索が終わつたようでアリスが話かけてきた。

「テオドラは何故か町外れの森に一人でいるようね。」

あそこは確かドラゴンとかの魔獣が出るはずなのだけど・・・」

「なら、好都合だよ。テオドラ一人なら勘ぐられることもないだろ

うし」

「なら早くいくわよ。」

そう言つてすぐ私の手を掴んで転移した。

side テオドラ

「メイドの目を盗んで城を出てきたはいいのじゃがどうしたものか」
「しつこく勉強をしろ、と言つてくるメイドに嫌気がさして飛び出してきたのはいいんじゃないがここは何処なんじゃ？」

見渡す限りの森でどうすればいいか、テオドラは途方にくれていた。
(町外れの森にはドラゴンが出ると言うしの)

静かな森に時たま聞こえてくる動物の声が恐怖を募らせる。

とりあえず来た道に戻ることにしたテオドラは道無き道をひたすらに歩いていた。

少し歩いて疲れが出てきたのか足が重くなってきた頃に木が大きく動く音が聞こえてきた。

心なしか少しずつ自分の方に音が近づいてきていた。

(ド、ドラゴンなのじゃ!!?)

(いや、いやなのじゃ!食われとうない!)

「だ、誰か助けてくれ!!」

つい大声を出してしまったテオドラの前に自分の背の長けの5倍ほどもある黒い色をしたドラゴンが姿を現した。

ドラゴンの方はエサを見つけたとばかりに襲い掛かろうとテオドラに突っ込んだ。

テオドラはあまりにも大きなその体とその凶悪なシルエットにおびえて動けなくなっていた。

ついに食べられると目を瞑り体を小さくした。

しかし、次にやってきたのは林檎があたった程度の反動だった。恐る恐る目を開けてみるとそこには空から降りてくる白いドレスと黒いドレスに身を包む二人の少女と自分の足元に転がる小さなドラゴンだった。

side ありす

『だ、誰か助けてくれ!!』

私達が転移で町外れの森の上空に現れた時、テオドラの叫び声が聞こえた。

下を見ればテオドラは黒いドラゴンに襲われそうになっており、怖さで腰が抜けたのかその場に座り込んでいた。

漫画を読んだだけとはいえ、知っている人が死ぬところを私は見たくなかったのだろう。

「アリス、助けてあげて!」

気がついた時には自分のサーヴァントであるアリスに助けを求めている。

「分かっているわ。大丈夫、これくらいならすぐに終わるから」

アリスは可愛い笑顔を私に向けたあと下にいるドラゴンに顔を向けなおして手をつないでいない方の左手の人差し指をドラゴンに向けた。

一瞬、ドラゴンの体がモノクロに見えたかと思うと、瞬く間に体が小さくなっていった。

最終的に手の平サイズになって効果が止まった。

「これくらいでいいのよね?」

「うん。でもこれって元に戻るの?」

このちびドラゴンの未来が気になったので聞いてみた。

「そうね、たぶん一日くらいで元に戻ると思うわ。」
一日がんばってくれよ、ドラゴン君。

とりあえずテオドラに合うために私達は飛行の魔術でゆっくりと地上に降りていった。

まだ腰を地につけたまま呆けた顔でテオドラは私達を見上げていた。どうやら余程ドラゴンが怖かったようだ。

「立てますか？」

手を差し伸べて立てるかどうかが聞いてみる。

「大丈夫なのじゃ」

あたふたしながらも質問に応えこちらの手を取って立ち上がる。

アリスは面白そうにその様子を見ていた。

テオドラはふう、と小さく息を吐く。

それで緊張が解けたのかこちらに質問してきた。

「お主たちが妾を助けてくれたのか？」

「そうよ。でも感謝するならありすにいいなさい、貴女を助けてつ
て言ったのはありすなんだから」

「そうか、ありがとうなのじゃ。それと助けてくれたお主も助かったのじゃ。すまぬがお主達の名前を教えてもらえんか？」

「私の名前はアリスよ。」

「で、私の名前があります。」

「ほえ！？二人とも同じ名前なのか！顔も瓜二つなのも関係あるのか？」

確かに私達を知らない人が見れば同一人物と思うだろう。

そのとうりなのだけれどここは双子とかで通しておくのが妥当だな。

煩いヤツが出てきそうだしな。

「顔が同じなのは私達が双子だからで、名前が同じなのは親が双子だと知らずに名前を一つしか考えてなかったからだよ。」

私がこうやって説明していると隣でアリスが不満そうな顔をしていたので念話で言い訳の説明をする。

アリスの顔がコロコロ変わっているところが可愛いな、と思いながらテオドラに質問を返す。

名前や立場は知っているが私達のことを怪しく思われないようにするべきだと思うからな。

「妾の名前か？妾の名前はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。ここヘラス帝国の第三皇女じゃ。」

どうだ、と言わんばかりに胸を張って言うテオドラ。

「テオドラ様って呼んだ方がいいのかな？」

私は内心微笑みながら質問した。

「テオでよい。妾もお主らのことをアリス（ありす）と呼ぶのじゃ。」

「それでアリスが妾を助けてくれたのじゃろう、どうやったのじゃ？」

テオドラはさっきのちびドラゴンを手に乗せて遊びながら聞いてきた。

「私の魔術を使ったのよ。私達は魔術師なの。」

私は魔術を使ったことないんだよねーと思い苦笑しながらアリスの説明を聞いていく。

「その年でドラゴンを倒せるほどの魔法が使えるのか！すごいのじゃない、お主達は。」

本当に驚いたようで目を輝かせてアリスの話を聞いている。

少しして何か閃いたのか勢いよく話かけてきた。

「そうじゃ！アリス、妾の遊び相手と護衛をやってくれんか？城に一人でいつもいるのは飽きたのじゃ。妾を助けてくれたお主達なら護衛もできるじゃろう。」

その言葉を待っていましたとばかりに私達は返事をした。

「いいわよ。私も行く所が無くて困っていたところだしね。」

「私もいいよ。テオとは仲良くなれそうだよ。」

「そうか、よかったのじゃ。あとは父上をお願いするだけじゃな。」

「よろしくね。テオ」

「こちらこそなのじゃ、あります。」

私達はあの後、テオといっしょに城に戻り門番に私達をテオが友達じゃ、と説明するとなるほどといった様子で城の中に入れてくれた。その後、テオを探していたメイドに叱られたり（何故か私達も叱られた）、テオの父上にテオがお願いして私達がテオの遊び役となった。

報告を見ていたが護衛のほうはどうでもいいと思っているみたいだった。

それはそうだろう、娘と同じくらいの子供に普通は護衛など任せないからな。

さてこれでやっと立てたと言ったところか・・

原作と言う名の舞台に

これからどうしようかな？

三話

side ありす

あれから数日が経ち私達が城に馴染んできた頃。

テオの護衛と言う名の遊び相手になった私達は戦場に出ることにした。

別に誰かに頼まれた訳ではない。

私の魔術の練習のためである。

あれから私はテオとほとんどいつしよに行動していたために魔術を使う暇がなかったのだ。

今回はテオが勉強をするからと私達は一日の休みをもらったのである。

「ありす、貴方にはまず初めに自分を守るための防御魔術と逃げるための転移魔術、もしものための回復魔術の三つを使えるようになるってもらうわ」

「わかったよ、痛いのは嫌だもんね。でも戦場って危ないんじゃないのかな？」

「そうね、でもありすなら大丈夫よ。私が全力で守るから」

「うん、よろしくね アリス。私もすぐにアリスを守ってあげられるようになるから」

アリスは自分の台詞が恥ずかしかったのか、私の言葉が嬉しかったのかわからないけど顔を真っ赤にして視線を横にそらした。

「ほら、早くいくわよ！」

膨れっ面で私に急かすように手を差し伸べてくるアリス。

それを私は自分の顔がにやけているのを感じながらアリスの手を取った。

そして、城の中の一室から二人の少女の姿が虚空に消えた。

side ナギ

あの怪物に誰もいなくなった戦場で出会ってから数日が過ぎた。

この数日も俺達は戦場に叩き出されていた。

しかし、あの怪物はあれからの戦場に出てはこなかった。

赤いあの怪物の正体は結局分からずじまい。

あの後でお師匠のゼクトに聞いてみたがそれでも分からなかったのだ。

誰もいなくなったあの戦場にいたはずの人々は誰一人として見つかっていない。

搜索の手がかりは赤い怪物だけ

あれはあの怪物が起こしたのか、それとも別の誰かなのか。

分かっていることは一つだけあの怪物が強いということだ。

「ナギ、また戦争のようです。急いで仕度をしてください。」

「ああ、わかった」

アルに返事をしながら仕度をする。

仕度といってもいつものローブ、アンチヨコ、杖だけだけだな。

俺達が戦場についた時にはもう戦争が終盤に差し掛かっていた。

「ナギ、こちらが押されているようです。早く加勢しなければ」

「そんなことぐらいわかってるよ！おら、いくぜ！

えーと・・・『百重千重と重なりて走れよ稲妻千の雷！！』」
無数の稲妻がヘラス帝国の兵を襲う。

「おお・・・」

「一撃で戦場を覆すとは・・・」

「これで取り合えずは大丈夫だろう。」

「いいえ、これだけでは駄目です。今回は敵に強力な魔法使いが入ったようであり、守りが堅い上に回復が以上に早いのです。」

「お！そいつは強いのか？」

「はい、恐らく敵は戦いの最前線で防御の魔法を張っているはずですよ。」

「わかった。そいつは俺が倒してきてやるぜ」

「ほ、本当ですか！？」

「そいつは強いんだろ。なら行くしかないだろ」

「やれやれ、ナギには困ったものですね」

アルがなんか言ってるが無視だ。

俺は素早く杖に乗ると全速力で前線に向かった。

『来たれ虚空の雷薙ぎ払え雷の斧！！』

前線に辿りついた俺は素早く詠唱を唱えると前線のと真ん中に打ち込んだ。

雷の本流が敵に当たって土煙があがる。

土煙が消えたところにあったのは目を疑うような光景だった。

そこには自分よりも小さい10才くらいの白いドレスを着た少女がいた。

そして、その少女が出たであろう防御の魔法が雷の斧を正面から受け止めてなお無傷で存在していた。

俺はさっきの呪文で力は抜いてないはずだ。
むしろいつもより多くの魔力を注いでいた。

いくら最大呪文で無いとしてもこれで無傷でいたものを俺はアルや
詠春といった紅き翼のメンバー以外で知らなかった。

俺は自分の体温が上がるのを感じた。

「おい！俺の呪文を防いだお前は誰だ！」

聞かずにはいらなかった。

自分と同じ様な年で同レベルの呪文を扱う少女のことを。

side ありす

アリスに防御の魔術を使うには体を膜で覆うイメージだと聞いてか
ら戦場に投げ出された。

ラインの繋がりからアリスが近くで気配を消して見守っているのを
感じるから安心はできるのだけど

勘のようなもので自分に魔法が近づいてきていることを感じた私は
とっさに教えてもらったばかりの魔術を行使した。

飛んできたそれはあっけなく私の魔術の壁に弾かれた。

「助けてもらってありがとうございます。増援の方でしょうか？」
どうやら後ろにいたヘラスの兵が私が守ったと勘違いしているよう
だ。

都合もいいのでここは乗っておく。

「そうだよ。私が防御を張るから貴方達は安心して攻撃に専念する
といいよ。」

私が入ってから戦場の動きが変わった。

防御に守られたおかげで余計な魔力を使わず周りを気にせず戦えるようになったおかげか押されていたヘラスの兵がどんどん進軍した。ちょうど勢いがのつたところで遠くに大きな閃光が落ちたのが見えた。

少ししてから光が落ちた方角から物凄いスピードで一人の人物が迫ってきた。

私は先ほどより魔力を消費して防御の魔術を使用した。

遅れること少ししてから私に向けて雷の斧が堕ちてきた。

私はなんとか衝撃に耐えて相手がいる方向を睨む。

「おい！俺の呪文を防いだお前は誰だ！」

すると拍子はずれな質問が聞こえた。

「それが人に名前を聞く時の態度？まあいいけど、私の名前はありません。貴方の名前は？」

私はそれを呆れたように返した。

十中八九、ナギだと思うけど。だって赤い髪青年ってか少年だし、さっきのは雷の魔法だったし。

「俺の名前か？俺はナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマスター！！！」

「ナギ、ね。それでどうするの？ここが何処かを考えれば想像もつくけどね」

「決まってるだろ！！俺の呪文を無傷で受けられるならお前は強いってことだ。だから俺と戦ってもらう！！」

「無理だね。私は攻撃用の魔法なんて使ったことないもの」

そう、私はまだ防御の魔術しか使えないのだ。

戦いになるはずがない。

「なんだそれ？魔法の射手も打てないのか？」

「ああ、そうだけど？何かもんく・・・」

「ありす、そこまでよ。今回はこれに関わるべきじゃないわ。」

いつの間にか私の横にアリスがいた。

ナギなんかは口を開けて驚いている。

「さあ、帰るわよ。練習は次の時でいいの。」

私は頷いてアリスの手を取ろうとした時、固まっていたナギが動いた。

「俺を無視して帰るんじゃないねえ！！」

『百重千重と重なりて走れよ稲妻千の雷！！』

戦おうとしていたところを邪魔されたからか怒ったナギが呪文を唱えてアリスに突っ込む。

アリスは片手をナギの放った呪文にむけた。

「邪魔よ」

ナギの最大呪文であろう千の雷をアリスは片手で防いでいたのだ。

そこにアリスは呪文を繋げる。

『冬の野の白き時』

アリスの片手から大きな氷の塊が打ち立たれる。

ナギは自分の最大呪文を片手で防がれるとは思っていなかったようでそこに隙ができていた。

アリスの放った氷はナギに正面からぶつかってナギは吹き飛んだ。

「さあ、帰りましょう。」

先ほどと変わらぬ笑顔で先ほどと同じ台詞。

「わ、わかった。でもあれって大丈夫なの？」

私はナギが吹き飛ばされた方を引きつつた顔で指差す。
「大丈夫なはずよ、手加減しておいたから。後からお仲間に回収されるでしょう。」

私はナギの身を心配しながらアリスの手を取った。

side テオ

テオが勉強を終えたことちょうどありす達が帰ってきた。
ありすは少し疲れた様子で。
アリスは満足顔で。

テオは何かあったのか気になったがありすの様子から聞くのをやめた。

何故かやめた方がいいよと言っている気がした。

何かを思い出したのか二人に話しかけた。

「明日からは大変じゃぞ?」

そんなテオの言葉に二人は何故と言った顔になった。

「私も戦場に行くことになったからじゃ」

さも当然のように言った。

「突然なんでなの!？」

「今日の戦場にありすも出ておったじゃろう?」

もう伝わっていたのかとありす達は諦めた様子で話の続きをそくす。

「友が戦場に出ているのに妾が出ないわけにもいかぬのじゃ。父上も好きにしろと言っておったのじゃ」

テオの親もこの娘を止めることはできないと知っているので止めようとはしなかったのだらう。

「わかったわよ。でも戦場では私達はテオを守るからね。」

「私達はテオの護衛なんだから」

テオのそんな様子に嬉しそつにありす達は返事を返した。

テオも私達の友達なのだから

三話（後書き）

感想を頂けると作者のやる気につながります。

四話（前書き）

この小説ってキーワードには何を入れたらいいでしょうか？

感想をお待ちしております。

四話

「あそこが妾が気に入っているカフェなのじゃ。一番のお気に入り
のメニューはパフェじゃ。あの甘くて冷たいのが最高のじゃ。」
食べている所を想像しているのか、ヨダレを垂らしそんな顔でお氣
に入りの店を紹介するテオ。

「テオがそこまで言うならそこにしましょうか。ありすもいいでし
よ？」

テオの説明を聞いて食べてみたくなったのか、入りましようと思を
誘うアリス。

「二人が言うなら仕方ないね。私も歩き疲れたし少し休憩したかつ
たんだよ」

そんな二人の意見を無下にはできず、本音をもらしながら後ろをつ
いていく私。

私達は今、テオに付いて城下町を散策していた。

理由は簡単でテオが私達に城下町を案内してやるといつてきたのだ。
勉強に飽きたテオがメイドの目を盗んで部屋を抜け出して私達の部
屋にやってきた。

それを外の様子から大体の予想がついていた私達はこれからどうす
るのかとテオに聞いた。

「これから城下町を案内してやろう。だからどうにかして妾を城の
外まで連れて行ってくれ！」

予想道理の答えにアリスは一度ため息をついた。

「はあ、分かったわ。手につかまりなさい。」

アリスは私に目配せしてからテオに手を差し出した。

私はそれでアリスのやろうとしていることに気づいた。

いきなりの事に疑問にもったテオだったがアリスの手をとった。

それに遅れるように私もアリスの手を取る。

そして私はこれで何回目だろうと考え、

いつものように私達はそこから消えた。

次の瞬間、目に映るのは結構な賑わいを見せる城下町の大通りが見える裏路地だった。

いつものことだがアリスはすごい。

早く私にも教えてもらいたいものだ。

私でも驚いているのに始めてのテオの驚きようはすごいだろう。

魔法でも転移魔法はレベルの高い魔法使いでしか使えない上に三人でこの長距離を転移したのだ。

普通の魔法使いなら魔力が無くなってしまっだろう。

案の定テオは余りの事に言葉が出ないほどに驚いていた。

それは仕方ないだろう。

これほどの魔法が使えるものとなれば余程の名の知れた魔法使いと思うのが妥当だ。

「どうやったのじゃ！？アリスは転移魔法が使えるのか！？」

やはり方法を聞いてきた。

それをアリスは無難に転移魔法だと説明した。

実際は魔術なのだが

テオはそれを聞いてやはりアリスはすごいだの、妾の見間違えではなかったのだと呟いていた。

そこからは当初の予定道理に妙にテンションの高いテオが城下町の店や、通りの名前などを私達に説明しながら城下町を一周ほどして冒頭の話に戻る。

店の中に入るとコーヒーの良い香りが漂ってきた。
本格的に作っているようだ。

店員が何名かと聞いてきたので三人と応えて四人がけのテーブル席に案内してもらいメニューをもらう。

客席はまばらで空いている印象を受ける。

今の時間は余り混んでいないようで助かった。

「妾はやはりパフェを注文するのじゃ。」

「私もパフェにするわ、ありすはどうするの？」

二人とも始めから決めていたようで私だけが残される。

「私はどうしようかな・・・」

「決まらないのなら私のを二人で食べない？私はもともと多くは食べられないほうだから」

私が一人悩んでいるとアリスが提案をしてきた。

私にとってはとてもいい提案だったのだが本当にいいのだろうか？

「遠慮しなくてもいいのよ。私もありすと食べたいし・・・」

当たり前だと言わんばかりに返事が返ってきたのだが最後の方の言葉が聞き取れなかった。

アリスは頬を赤くしてうつむいてしまったからだ。

もともとアリスの提案を私が断るわけがないのだけれど

注文から少しして結構なボリュームのパフェが二つテーブルになった。
んだ。

これは私ではとてもではないが一人では食べきれなかっただろう。
やはり二人で一つを注文して正解だったようだ。

「これはがんばって食べないとね」

「そうね。私もこんなに大きいとは思ってなかったわ。」

どうやらアリスも予想していなかったようだ。

始めに私達にこれをお勧めした張本人は余裕の顔でパフェに挑んでいた。

「テオはこんなに食べられるの？とてもではないけど私では食べきれないんだけど」

「大丈夫に決まっておるのじゃ、妾はいつも一人で食べにくるのじやぞ。」

さも余裕そうな顔でパフェを食べてる。
ホントに一人でこれを食べきるようだ。

「私達も食べよっか？」

アリスに聞いてみるとアリスは顔を真っ赤にして私の方を見て言った。

「お願いがあるんだけど、ariusが私にぁーんって食べさせてくれない？」

私は一瞬何かの冗談かと思ったがアリスがチラチラと見ている視線の先にはお互いにスプーンを持って食べさせあっているカップルがいた。

あれを見て何を思ったのかこんなことを頼んできたのだろう。

もちろん答えはイエスだ。

私アリスのお願いを断るわけがない。

私がアリスにいいよ、と応えるとアリスは見るからに顔を綻ばせスプーンを私によしてきた。

そのスプーンを受け取りパフェから少しクリームを取った。

アリスは口を開けて私が食べさせてくれるのを今か今かと待っていた。

それを小鳥みたいだなーと思いつつながら「ぁーん」とアリスの口に持っていた。

アリスはそれをパクつと真っ赤な顔で食べながら美味しいと呟いた。私は自分も食べようかなと思っているとアリスが私の持っているスプーンを取った。

アリスはそのスプーンで私と同じようにクリームを取ると私に「あーん」と向けてきた。私は多少驚きながらもそれを口に含んだ。

私もお返しとばかりにアリスからスプーンを取るとパフェからすくってアリスに「あーん」と言いながら差し出す。

アリスは反射的にそれをパクつと口に含んだ。

それから驚いたように顔を伏せ

小さな声で「ありすと間接キス・・・」と呟いてその可愛い顔を真っ赤にした。

私が「アリス、顔真っ赤だよ？」と意地悪に言つとボンつと音がなるかと思うほどに耳まで真っ赤にする。

そんなアリスを眺めているとテオが話かけずらそうに話かけてきた。「お主達はホントに仲がいいのじゃな。」

苦笑いをしているテオを他所に私はそうだよと答える。

「それはいいのじゃがな、早くしないと妾だけ先に食べ終えてしまっぞぞ？」

言われてテオのパフェを見てみるとすでに三分の一が無くなっていた。

私は急いで新しいスプーンを取るとパフェに手を伸ばした。

気が付いたようにアリスが顔を上げ私に続いてスプーンをパフェに伸ばす。

二人で交互にパフェをつついていき

テオがパフェを食べ終える頃にはなんとかパフェを完食することができた私達であった。

食べ終えたテオの頬には白いクリームが付いていた。

私はテオに動かないように伝え、手でそれをすくって自分の口に放り込む。

「ありす、ありがとうなのじゃ」

頬を薄っすらと赤く染めたテオがお礼を言ってくる。

それを見ていたアリスが膨れっ面でいた。

案の定というかアリスの鼻の先にもクリームが付いていた。

私はアリスにも動かないよう言って、

両手でアリスの顔を動かさないように固定して顔を近づける。

目を瞑るアリスの鼻のクリームを舌で舐め取った。

目を開けたアリスはあっけに取られたような顔で呆然としていた。

私がどうしたの？と声をかけるとアリスは顔を真っ赤にして気絶してしまった。

テオがやれやれといった様子でアリスに駆け寄ってアリスを揺すって起こした。

アリスはなんで気絶したのだろうか？

前の戦場に出た時に貰っていた報酬でお金を払い店を出る。

呆れた様子のテオと、まだ顔が赤いアリス。

外はすでに空がオレンジに染まっていて私達は手を繋いで急いで城に戻るのであった。

明日はテオの初めての戦場。

私達が守らなければ、という言葉が胸に宿して。

その頃、紅い翼ではナギが病院のベットで体を治していた。

この前のアリスとの戦いで派手にやられたナギはそのままアルと詠春に病院に運ばれたのだ。

アルがナギにどんな相手だったのかと聞くとナギは気まずそうに自分よりも小さな可愛い女の子だったと応えた。

アルはナギがそんな女の子に負けたことを驚きながらも興味を持っていた。

ナギを負かす實力にも興味を持ったがアルが気になったのは彼女の容姿だった。

アルがどんな服が似合う子なのでしょうとか気持ちの悪いことを言っている隣でゼクトはその魔法に興味を持っていた。

隠しているのか殆ど感じ取れない魔力、そしてナギの最大呪文を片手で防ぐ防御

一言で大きな氷を打ち出す魔法。

どれをとっても興味が尽きない。

合ってみて見たいとゼクトは思いをはせる。

ナギはナギで次はぜってー負けねえ！！、と叫ぶ。

詠春はそんな皆の様子を見ながらナギに「それなら早く怪我を治せ。

」と言った。

そんな言葉にガクッと肩を落として落ち込むナギ。

しかしナギ達がありす達と会うのはもう少し先の話

とても意外な形で会うことになるであった。

五話

side アリス

私が恥ずかしさの余りに気絶してしまった日から一日が経った。
私達はテオの横に付くように護衛をしている。

これから戦場に行く。

ありすがテオを守り、私が外敵をなぎ払う。
それだけのことなのだ。

「テオ、本当に行くの？地獄が待っているかもしれないわよ」
テオの心を動かすことはできないだろうが最後の確認をとっておく。
これから見る光景にテオが潰れないように覚悟を決めさせるのだ。

38

「いいのじゃ、アリス。これも妾が決めたことなのじゃ」
いつものように胸を張って答えるテオ。

だがよく見てみるとその体が震えているのが分かってしまう。
これが精一杯の強がりなのだろう。

私はそれを見なかったことにして前を向いた。

私達の乗っている飛行船から一kmほど先では既に戦闘が始まっていた。

飛び交う魔法の嵐。

それらの魔法が両軍の兵に当たり、一人また一人と命の灯火が消えていく。

私に人の魂が見れるのならばここはさぞかし賑やかなはずだ。

ありすがテオの手を握っているのが見える。
なんだか嫉妬しそうになったけどそれを抑えて私も反対の手を握る。
やっぱりテオの手は震えていて
でも私は少しでも安心できるように強く手を握る。
ありすも同じようにしているようだ。
ちよっと嬉しい。

戦場が近くなるにつれて流れ弾が多くなってきた。

そんな時、私達の飛行船に向けて光の魔法が迫ってきた。
それを見たありすは胸に手を当てて祈るようなポーズをして自己を
変革するための呪文を呟く。

『さあ、ようこそアリスのお茶会へ！』

それはありすではなく『ありす』の言葉。

ありすがこの言葉を始動キーにしたのは私を思っていたの
かもしれない。

「『ありす』に代わってあ私がアリスの友達になってあげる」って
言われたような気がした。
それだけで私は救われた。

呪文を呟いたありすを中心に白い球体の膜が広がっていく。

私とテオが真っ先に包まれて少しづつ飛行船全体を包む。

飛来した魔法はそんなありすの防壁に拒まれて簡単に消える。

この魔術を発動したのを察知したのか先ほどより多くの魔法の矢が
打ち込まれる。

今の段階ではありすだけでも余裕だろう。

でもありすだけに任せておけないもの。

さあ、私も友達のために動かないとね

side ありす

私が呪文を唱え終える。

「私ができるだけ近くの敵を落とす。ありすはテオをそこで守って
！」

そう言い残してアリスは戦場に身を投げる。

「ありす！アリスだけで大丈夫なのか！？」
テオが心配そうに尋ねてくる。

「テオ、初めて私達と出会った時のこと覚えてる？」
「あたりまえじゃ。何で今聞いてくるのじゃ？」
私は少し間を空けて聞いた。

「ならあの時テオを助けたのはどっちだったかな？」

私はアリスを信じている。
アリスが負けるはずがないと
だから笑顔で答えることができる。

「それに大丈夫だよ、アリスなら。だって私の友達^{サーヴァント}なんだから」

私とテオは戦場の端っこにいる。

ヘラス帝国の第三皇女がここにいることがばれると面倒だし、今は戦場に出るのは危険だ。

兵達が争っている。

何よりアリスが暴れているからだ。

アリスを中心に多くの色の魔術が吐き出される。

アリスに挑もうとした者、私達に攻撃を仕掛けようとした者が宙を舞う。

「ホントにアリスはすごいな。」

「そうじゃな。あれだけの転移ができるじゃ、弱いはずがなかったのじゃ」

いつものように関心するように私にテオも賛成する。

「何でアリスはいつもあれだけの魔力を抑えているのじゃ？」

テオの純粋な質問に一瞬ドキツとする私。

「それにあんな魔法は見たことが無いのじゃ。それでも魔法も勉強しておるのじゃぞ？でもアリスの使っている魔法は全部見たことがないものばかりじゃ、何か理由があるのか？」

テオの質問に私は困っていた。

どう返したらいいものかと

テオはアリス以外で初めて出来た友達だ。

質問には答えてあげたい。

でもこれを話してしまうと私達がこの世界の人間では無いと知られてしまう。

どうしたものかと考えたすえに私は本当のことを話すことにした。

「わかった、話すよ。でもこのことは誰にも言わないと約束できる

？」

テオは無言で頷いた。

「まず始めに私はいや、私達はこの世界の住人じゃないんだ」

「この世界の住人じゃない？ありす達は旧世界の生まれなのか？」

「違う、旧世界でもない。こことは違う次元。いくつも存在する平行世界から私達はきたんだ。」

「平行世界、そんなものが存在するのか？」

「そうだ、存在する。テオは信じるかい？」

私はこの質問が少し怖かった。

テオに信じてもらえないのではないのだろうか

でもそれは杞憂に終わったようだ。

「勿論じゃ、友達を信じないはずがないじゃろう？」

さも当然のように返してくれた。

私は嬉しくてテオに抱きつきたいのを我慢して話を続けた。

「一つウソを付いてたことがあった。私とアリスは双子じゃないんだ。」

「そんなわけ無いのじゃ！現にお主達はそっくりなのじゃ！！」

これにはさすがのテオも驚いたようだ。

疑いの目で見てきている。

「本当だよ。私とアリスは別人なんだ。」

「なら何故そこまで容姿が似ているのじゃ？」

「そうだな。昔、一人の女の子がいたんだ。

その子は生まれつき体が弱くて病院に通いつめていた。

体が弱くて運動ができなかったその子はいつも漫画やゲームばかりしていたんだ。

当然そんなので友達が出来るわけがなくていつも一人で過ごしてい

た。

そんな時、面白そうなゲームを見つけたんだよ。

F a t e / E X T R A っていうゲームでね、主人公が聖杯戦争ってゲームに参加するんだ。

聖杯戦争は予選を通過した計128人のマスターとそれに従う128騎のサーヴァントによって行われる。

トーナメントが行われ、敗者は死に優勝者だけが聖杯を手に入れることができる。

サーヴァントとは英雄を再現拡張し実体化させてモノだ。

サーヴァントにはクラスが存在し、セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、アサシン、バーサーカー、そしてキャスター。

これらの中からマスターに何らかの関係があるものが召喚される。

ゲームの主人公が召喚するサーヴァントはセイバー、アーチャー、キャスターから選べる。

そして私は主人公を操ってトーナメントを私にとって大きな出来事になる第三回戦になった。

初めて出会った『彼女達』は禍々しい謎の巨獣を引き連れていた。それを主人公はこれを知恵を使ってなんとか倒す。

『彼女達』は聖杯戦争という殺し合いの中、幾度も無邪気な笑顔を向けて一緒に遊ぶよう催促するんだけど、これは純粹に誰かと遊びたいという年相応の願望からくるもので、自身の我儘に付き合ってくれる主人公に少なくとも本気で感謝していた。

ただど加減を知らない彼女たちは鬼ごっここと称して、有り得ない空間転移を繰り返したり、誘い込んだ主人公に魔術を使い、存在の消滅の危機に追い込んだ。

無邪気にはしゃぐ彼女らに躊躇いながらも主人公により敗れる。

独りぼっちだった『彼女』は、側でずっと遊んでくれた『彼女』と、誰にも見られなかった自分を見てくれ、遊んでくれた主人公に感謝と別れを告げて、そんな彼女の側にいたサーヴァントの『彼女』は、次回の聖杯戦争ではもう『彼女』と一緒にいられない事に涙して、砂糖菓子のように消えていったんだ。」

「これが私を大きく変えた出来事。私のように誰にも見られなかった彼女に私はなりたかった。彼女になって彼女のサーヴァントの『彼女』と一緒に遊べたらどれだけ楽しいだろうとも考えた。」

彼女の名前はありす。

白いドレスを着ている幼いマスター。

そしてそのサーヴァントの名前はアリス。

黒いドレスに身を包んだキャスターのサーヴァント。」

「わかった？これがアリス。私の憧れた存在。」

「わかったのじゃ。これは誰にも言わないのじゃ。」
「テオそれだけ言つとそれ以上は何も言つてこなかった。」

六話

争いはヘラス帝国の勝利に終わった。

主な原因は戦場の中心にいた黒いドレスを纏った少女、アリスなのだが

「なんなのよ。この空気は」

戦場に戻ったアリスを待っていたのは戦場とは違う重さの空気だった。

早々に呟くアリス。

「ってわけでアリスのこと話したんだ。」

ありすが帰ってきたアリスに気がつきテオから見えない位置に移動してアリスが居ない間のことをありすが説明した。

説明を聞くうちに理解したようで表情に真剣みが増してくる。

「テオは私のこと何か言ってたの？」

「何も、このことは誰にも言わないからって言ってたくらい」

「なんの話をしておるのじゃ？」

突然、後ろから声が聞こえた。

振り向くといつもとテオの姿があった。

「どうしたんじゃ、こんな部屋の端で固まって」

驚いている私達を他所に話しかけてくるテオ。

「アリスの秘密を勝手に聞いてしまっただけが悪かったのじゃ。こんな妾

を嫌わないでくれ。」

アリスは自分が勘違いをしていたことに気がついた。
テオは私のことを嫌いになったからあんな空気になっていたと思っ
ていたのだ。

だがどうだ。

実際はテオも私と同じ勘違いをしていたではないか。
おかしいこともあったものだ。

「なーんだ、私はてっきりテオに嫌われたんじゃないかと思ってい
たのに」

「なんで妾がアリスを嫌わないといけないのじゃ！」

「だって友達なのに秘密にしてたから・・・」

「友達にだって隠し事の一つや二つあって当然じゃ。」

「ありがと。」

頬を赤く染める二人。

友達が居なかった者同士のせいか勘違いがあった。

これも友達がいなければ経験できないことである。

テオはその身分のために、アリスはその生まれのために友達と呼べ
るものが存しなかった。

その様子を嬉しそうに眺めるアリス。

またありすも友達がいなかった。

アリスに自分を重ねているのだ。

s i d e 紅き翼

「復活だー！！」

病院の前の広場にナギの大きな声が響き渡る。

前回の戦いで黒いドレスを身にまとった少女につけられた傷がやっと治ったのだ。

長い間病院に拘束されていたナギ。

「おや、また元気がいいですねナギ。 そんなにあの少女にリベンジしたかったのですか？」

困ったものですね、と言いながら笑っているアル。

「あつたりまえだ！最強の魔法使いの俺が負けるはずがねえ！！
前回は気を抜いてただけだ」

「ホントにそうだと嬉しいんですがね。それにナギがない間にあつた争いでは彼女がヘラス帝国側に付いてこちら《連合》が負けしてしまったようですし。」

「それなら俺がアイツの相手を引き受けてやるよ。それで五分五分だ。」

「頼みましたよナギ。彼女が次の争いに出てきたら任せます。」
「わかったぜ。」

高らかにしたナギの宣告。

そんないつもの光景これが見られる日が紅き翼にはどれ程残っているのか。

この歴史を知っているものは誰も存在しない。

side ヘラス帝国

これより聖地『オステイア』回復作戦を実行する。

この作戦は最重要だ。

戦線を中心に第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェス
ペリスジミアの護衛であるアリスを立たせる。

そこに敵が目を奪われている隙に攻め込むのだ。
この意見に異議のあるものはいるか？

はい。私のその意見に反対です。今回の作戦ではアリスは出さずにそれに匹敵する者を私が呼びましょう。私に任せてもらえれば必ずや期待に応えてみせましょう。

そなたは信用しておる。なら任せるがよいな？

はい。この程度、アリスに任せる必要はございません。必ずや成功させてみせましょう。

ヘラスの城内の王座で行われる会議。

そこに参加するのは大物の政治家や名立たる英雄たち。

そこでただ一人異彩を放つ存在。

10歳くらいの容姿に白いドレスを纏った西洋の人形のように綺麗な少女。

発言で決定事項であった作戦を覆してしまうほどの信頼を受ける少女ありすは今回の作戦で自分だけの力でどれだけの召喚ができるのか試す機会を得た。

テオが戦場に出るというサプライズもあったが元々この戦争に参加しているのは世界のためではない。
自身のスキルアップのためである

今回はどれだけ私は一人で戦えるのかを知りたかったのだ。
つまりさっきの発言はほぼ嘘である。

しかし、今まで多くの成果を上げてきたアリスの片割れだったため

に今回は意見が通った。

オスティア回復作戦は原作に大きく関わってくる出来事。
できればアリスを介入させてストーリーを壊したくなかったことも
入る。

私の『友達』はどれだけのことができるのか
期待がつのるひと時だ。

side 紅き翼

「くっ」

「遅かったか」

俺達がオスティアに着いた時、そこはもう数百の戦艦が飛び交う戦
場へと変わっていた。

「ちッ・・・ 気にいらねえぜ」

上空からはヘラス帝国の巨大な戦艦が白い人型の鬼神兵を投入して
いる。

それに続くように魔法の雨の嵐。

地上からは鬼神兵が

上空からは魔法使いと戦艦が迫っている。

「精霊砲全弾消滅！」

「消滅！？ 王宮の魔法障壁ではないのか！？ まさか・・・！？」

「広域魔力減衰現象を確認！ 減衰速度加速中・・・ 間違いない
りません！！」

「黄昏の姫御子です！！」

戦艦と鬼神兵から放たれる精霊砲。

しかし、それを消しさる完全魔法無効化能力。

「黄昏の姫御子・・・何だってそんなもん!？」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょう。」
平然と言いのけるアル。

「だが王族だろ!？」

まだ小さな女の子だつて聞くぜ」

「冷静になれナギ。やかましいぞ」

「俺は常に冷静だつっの」

興奮気味のナギを抑える詠春。

「戦争ですからね

・・・向こうの真の目的もおそらく

それに少女の年齢も私同様見ためどつりとは・・・」

「くそっ」

「防御結界・・・」

「うわあッ」

前方では黄昏の姫御子がいるであろう建物が今まさに襲われそうになつていた。

ナギの敵との間に入り雷の暴風を放つ。

それだけでヘラスの鬼神兵は崩れ落ちてしまった。

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ
後は俺に任せときな」

「お・・・お前は・・・紅き翼・・・千の呪文の・・・」

「そう！！ ナギ・スプリングフィールド！！
またの名をサウザンドマスター！！！」

ノリノリで自分の名前と二つ名を言い放つナギ。

横では詠春が自称の二つ名を言い放つナギに突っ込みを入れていた。

「えーと・・・ 百重千重と重なりて走れよ稲妻
行くぜ オラアッ！！」

『千の雷！！！！』

ナギに続くようにアル、詠春も敵をなぎ払っていく。
その様子はまさに英雄。

「安心しな

俺達が全て終わらせてやる。」

「な・・・ しかし・・・」

「敵の数を見たか！？ お前達に何が・・・
俺を誰だと思ってる ジジイ」

「俺は、最強の魔法使いだ」

「あんちよこ見ながら呪文唱えてるあなたが言っても今ひとつ説得力がありませんね」

ナギへの信頼からそれでもナギの言葉を信じている様子で笑うアル。

「それに・・・ あなた個人の力がいかに強大であろうと世界を変えられることなど到底・・・」

「るせーっ つってんだろアル。」

俺は俺のやりたいよーにやってるだけだ、バーカ」
ナギは照れたように言い放つ。

そこでナギはようやく気がついたようにこの塔の中心に繋がれている少女に歩み寄る。

「よう、嬢ちゃん。 名前は？」

「ナ・・・マエ・・・？」

少女はその虚ろな瞳で考える。

「アスナ・・・」

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「なげーなオイ、けど・・・アスナか、いい名前だ」

紡ぎだされたその名前に応える。

「よし、アスナ待ってな」

そう言ってマントを翻す。

アルと詠春に発破をかけ、外へ向かう。

アスナはその背中を見送った。

七話

激化するオスティアでの戦争。

強力な魔法力を有するヘラス帝国の侵攻力は圧倒的だった。

しかし、そこにそれを拒むものが現れた。

紅き翼だ。

これを排除するためにヘラス帝国は最終兵器とも言える存在を送りこんだ。

白いドレスに白い髪 of 少女。

少女の名前はありす。

今ここに彼女の見たことも無い魔法陣による召喚が行われる。

魔方陣から溢れる魔力に大気が軋む。

紫電をあげてうなる。

やがて周囲は眩い光に包まれた。

光が収まった時、そこに現れたのは悪魔だった。

実際には悪魔では無いのだろうがそう呼ぶに相応しい怪物。

架空の巨人『ジャバウォック』

ありすの『お友達』

side 紅き翼

「行くぜ！オラッ！」

ナギがあんちよこで呪文を唱え打つ。

それだけでヘラス帝国の鬼神兵が一体また一体と崩れ行く。
しかし、ナギが次の相手にかかるうとした時それは現れた。

「……………!!」

ケモノの咆哮の様な声が戦場に鳴り響いた。

前に一度だけ対したことのある……

「アル!! こいつは!」

「ええ、あの戦場で見た怪物で間違いないでしょう。　こんな禍々しい魔力は他に見たことはありません。」

アルが応える。

「そうだな、だが前回と様子が違う。　魔力が前より圧倒的に少ない。　これなら私達だけでも倒せるはずだ。」

確かに詠春の言う通りであった。

前回見たときに比べて魔力の量が減っている。

前はナギの魔力総量の三倍以上あった。

しかし、今回はナギと同等かそれ以下なのだ。

相手が弱体化していることに気が付いたナギ達は怪物『ジャバウオツク』を見据える。

どうやら相手もこちらに気がついたようだ。

森の木々をなぎ倒しながら一直線にこちらに向かっている。

先に動いたのはナギだった。

上空からジャバウオツクがいるであろう場所に狙いをつけて雷の暴風をぶつ放す。

『ドドオオン……』

響く雷。

呪文があたった場所からは木々を消し飛ばしながら土煙が上がる。

煙が晴れた。

ジャバウオックはさすがに無傷とはいかなかったのか所々に傷ができています。

そして咆哮。

同時にジャバウオックの体が赤く光を放ち、その体を魔力が駆け巡る。

ジャバウオックの力が強化されていくのが目で見てわかる。

跳躍。

それだけでナギの目の前まで接近。

ジャバウオックは右腕を振りかぶりナギに向かって振り下ろす。

突然のことにナギは避けることができず簡易の障壁を張る。

しかし、ナギの障壁は紙のように裂ける。

それに気がついたナギは咄嗟に右手で軌道をずらす。

結果、ジャバウオックの右腕はナギの左の脇の下を通り空振りに終わった。

ジャバウオックはそのまま体当たりのように体をぶつける。

ナギは吹き飛ばされるがそれをアルと詠春が受け止める。

赤い翼で飛翔するその姿はまるで伝承をそのまま引きずり出してきたような悪魔。

口を大きく開いて炎の塊をナギに放つ。

『雷光剣！』

詠春の技が炎を切り裂いてジャバウオックに迫る。

ジャバウオックは障壁で防いで威力を軽減させる。

畳み掛けるようにアルのお得意の重力魔法で動きを拘束する。

ナギは呪文詠唱に入り、詠春は気を溜める。
そして開放。

『千の雷！！』

『雷光剣！！』

ジャバウォックが光の奔流に巻き込まれる。

ジャバウォックは足の先から粒子になって消えていった。

「なんとかなったな」

「ええ、しかし厄介なことになりました。」

「どうしたんだ？」

アルの発言にナギと詠春は首を傾げる。

「先ほどの赤い怪物は光のように消えていきました。つまり実体が無かったのです。」

「おい、それはどーゆうことなんだ！？俺は確かに呪文を当てた感触があつたぞ」

「それは当然です。あれはシキガミや使い魔の類のものです。だからこそ厄介なのです。」

つまりはアレだけの物を作成することができる術者が存在するということなのですから」

アルの言う通りだ。

アレだけの怪物を作成できるのであれば相当の実力者と見て間違いない。

そしてこれだけの使い魔を作成できる者がヘラスにいることがわかってしまう。

「ですが今回も一体しかここにいないことから作成に時間が掛かる。

または一度に一体しか制御できないことがわかります。これから今回のレベルの相手なら大丈夫なはずです。」

「それなら安心だ。これならナギだけでも対処できる相手だからな」

「これからもアイツが出てきたら俺が相手すればいいんだろ？なら喜んで引き受けるぜ！！」

「それでいいですよ、ナギ。」

その際に私がなんとか術者の特定をしましょう。おそらく見つめることはできないでしょうがやらないよりはマシです。」

それからオスティアの戦いでは紅き翼の活躍によりヘラス帝国のオスティア回復作戦は失敗に終わった。

ヘラスのオスティア回復作戦の失敗の主因である紅き翼には討伐隊などが送りこまれたがナギ達はこれを悉く返り討ちにする。

ヘラスは傭兵としてラカンを送り込むが何度か戦っている間に仲間になる。

この時、誰もジャバウオックが初めていた場所がどうなっていたのかを気にしていなかった。

気にする時間もなかったのかもしれない。

重要な作戦で失敗したヘラス帝国は大規模転移魔法の実戦投入によって連合の喉元

全長三百キロに亘って屹立する巨大要塞「グレートブリッジ」をついに崩壊せしめる。

そして時はグレートブリッジ奪還作戦

『千の雷！！』

『雷光剣！！』

『斬艦剣！！』

『えいえんのひょうが！』

紅き翼のメンバーの技が鬼神兵に襲い掛かる。

眩い閃光。

それに続く爆弾のような轟音。

「お、お前達は連邦の！！」

「その通り！ 俺はナギ・スプリングフィールド！ またの名をサウザンドマスターだ！！」

そのあとも紅き翼の攻撃は続き防戦一方のヘラス帝国は一方的に負けてしまった。

ありす達が出てくることもなく。

一方、ありすとアリスはテオを守ることに掛かりきりであった。ありすが活躍してからというもののテオを襲うものが続出したのだ。原因はありすが負けてしまったこと

つまり、俺でも勝てるんじゃないんだろうか？という考えをするものがあらわれた。

相手がたとえナギ達であったとしても負けたことにはかわりない。今まではアリスが戦場で負け無しだった。

しかし、負けてしまった。

襲撃者達は実際にはそこまで強くないのではないのだろうか？と考えた。

引つ切り無しに襲い掛かってくる襲撃者のためにアリス達はテオの傍を離れることができなかった。

アリス達がテオを守っている間に世界は大きく動いた。
戦況は一気に大逆転。

連合は勇躍。

敵軍を攻め戻し帝国領内へ躍進する。

紅き翼には新たな仲間としてガトウとタカミチが入る。

そして

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されててこんな大戦はもうおこらねえそうだ。

戦を始めたが最後みんなまとめて滅んじまうからだってよ。

だが、こっちの戦はいつ終わる？

帝都ヘラスまで攻め滅ぼすってか？

やる気になりやこの世界だって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。

そんなこと続けてどうなる？

意味ねえぜッ！！」

「まるで・・・」

「まるで

誰かがこの世界を滅ぼそうとしているようだ

ですか？」

「ある意味そのとおりかも知れないぞ。」

「ガトウ」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。
やはり奴らは帝国・連合双方の中枢にまで入り込んでいる。」

「秘密結社『完全なる世界』だ」

日が傾き空が夕日に染まる頃、
連合の本国首都まで呼び出されていた。

「なんだよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ」
「あつてほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」
「そうだ」

「マクギル元老院議員！」
「いや、わしちゃう。
主賓はあちらのお方だ」

「ウエスペルタティア王国・・・
アリカ王女」

「ワハハハハ
上手いことやりがつてこんガキヤ！」
「ああ！？」
何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ

お姫様とイチヤイチヤキヤキヤイ おしゃべりしてたろーがッ！」

「してねっつの何がイチヤイチヤだ バカ」

「なーに言ってんだよ俺なんか・・・」

『気安く話しかけるな下衆が』

だぜ？」

・・・いや ありやイイ女だぜ

一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？マゾかアンタ？

俺あ あんなおつかねえ女見たコトねえぞ」

「グハハハハハ

そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな。てめーはよ。」

「んっだ そりゃ。

意味わからんねえ触んなっつーの

勝負すつか てめ」

「しかしよ、ウェスペルタティアの王女ってことはアレか？

例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや・・・

姫子ちゃんのこととは・・・なんか話にくいみたいだった。」

「へえ？」

「アリカ姫・・・か」

八話

続く戦い。

あまりにも長いその戦にテオドラは違和感を覚えた。

一度灯った違和感の灯火はなかなか消えなかった。

そこで考えたテオは危険だが先に進める一手を打った。

一歩間違えると自分の身が危険に晒される一手。

それは連合の姫、アリカ・アナルキア・エンテオフエシアに協力を申し込むことだ。

そして今。

テオはアリカと同室で会議を行っている。

ここはメセブリーナ連合の本国首都。

ここには秘密裏にアリス達とやってきた。

他の護衛を付けなかった理由。

それは調べていく内に帝国の上層部ですら黒い可能性が出てきたからである。

なので今現在テオを守っているのは部屋の前で辺りを警戒しているアリス達だけ。

「それで妾はそなたに協力を頼みたいのじゃ」

「こちらこそ主に協力を申し込みたかったところじゃ。ところで主の護衛は彼女達だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫なのじゃ、それに妾はアリス達以上に強い『魔法使い』を見たことがないのじゃ」

「ほお、主がそこまで言う者達か。じゃが私も最強の魔法使いには心当たりがある」

「そうか、妾も会ってみたいものじゃ。」

テオがアリカの発言に興味を持ったその直後。

二人の部屋の床中に魔法陣が張られた。

それは部屋全体を覆うほどの光を出した。

そしてその光が無くなった部屋には既に二人の姿はなかった。

「テオっ！！」

いきなり現れた魔法にアリスが気がつき、部屋のドアを開けて入った時にはもうその部屋はもぬけのからだった。

「私がちゃんと気をつけていれば！」

「わかっていたはずなのに止めることができなかった私のせいなんだよ！」

「ありす・・・そうね。それにここでモタモタしてるだけじゃ前に進めない。」

早くテオを助けないと」

ここにいても進めない、故に行動を起こす。

ありすの決意は止まることを許さないのだから。

「アリスは私をテオがいる夜の迷宮に送ってくれればいい。」

その後は霊体化してついてきて。

ありすが二人いることはあいつ等に知られると厄介だ。」

ありすのいつもと変わらぬはずの顔から真剣な気配をアリスは感じたのだろうか、何も言わずにありすの手を取る。

友が待っているのだからアリスに止まることは許されない。

己が望みのために

空には満天の星空。

窓から覗く満月が淡く二人の少女を照らす。
手を繋ぐ二人は友のために

部屋の鏡が少女を映す中、光と供に姿を消した。
後には満月を映す鏡だけが自己を主張する。

どれほどユメに見ただろうか。

囚われの妾を助けに来る騎士の姿を
政治などと言う牢獄の扉を開けて連れ出してくれる二人の少女の姿を
こうして自由を手に入れた。
友を手に入れた。

感謝してもしきれない。

だから妾は自身の全てを捧げよう。

この身も

この魂さえも

ありす《アリス》は妾の騎士。

何が起きても妾を守ってくれる。

断じて比喻ではない。

そうでなければウソだ。

ありす《アリス》が誓ってくれた。

妾を守ると。

例えそれが二人にとっては遊び程度のものでも
友が誓ってくれたのだ。

だから妾はどんな時でも臆することはない。
ありす《アリス》が助けに来てくれるのだから。

声が聞こえる。

思考が戻ってくる。

「・・・オ、・・・テオ！」

モノに色が戻る。

いっしょに攫われたアリカが妾に話かけているようだ。
返事をしなければ、

「どうしたのじゃ、アリカ？」

妾の返事に驚いたようにその表情が分かりにくい顔が崩れる。

「どうしたじゃないだろう！私が何度も話しかけても返事がなかったではないか！

奴等に何かされたのかと思ったほどじゃ。」

「大丈夫なのじゃ。何もされてないのじゃ、ちょっと考え事をしていただけなのじゃ。」

どうやら長く思考しすぎていたようだ。
気をつけないならぬ。

「こんな状況でよく考え事なぞできるものじゃな」

「そういうアリカこそ余裕そうではないか。」

そんな妾も他人が見れば余裕な表情をしているのだろう。

「私にはやらなければならないことがある。それに必ずヤツが来てくれると信じておるからな」

そう妾に話すアリカの顔は心なしか微笑んでいた。

「テオ、お前はどんなのじゃ？お前も余裕そうじゃろう。ここが敵

の基地と分かっているのか？」

「当然じゃ、ただ約束があるのじゃ。」

「約束？」

応えに時間は要らない。

妾にとつて当然と言える答えなのだから。

「妾の騎士は妾に誓ってくれたのじゃ。私を守ると」

「それだけ・・・か？」

またも驚いた様子で私を覗きこむ。

「それだけじゃ。二人を妾は信じておる、だから安心して待っていられるのじゃ。」

建物の外か爆音が聞こえてくる。

近づいてくるその音にアリカは眉を顰め、テオは音のする方向の笑顔を向ける。

次の爆音と共に白いドレスが覗きこむ。

そして・・・

「テオ！！助けに来た！」

私の信じた姿が現れた。

転移で夜の迷宮の前に現れた私達。

アリスはすぐさま探索魔術でテオの位置を把握するとそこに一直線に行けるように魔術を打つ。

アリスの手のひらから出た炎が直線に飛ぶ。

壁にあたるとそこは爆音と共に崩れ落ちる。

それを確認すると続けざまに炎を打ち込む。

そしてテオが無事なことを確認すると音もなく姿を消した。

テオから見れば私だけが助けに来たように見えただ。
そこから私はテオに声をかける。

「テオ！！助けに来た！」

何故かテオは笑顔で私に飛びついてきた。

「ありす遅いのじゃ、妾は待ちつかれたのじゃ。」

アリスはどうしたのじゃ、いっしょではないのか？」

驚いているアリカ王女を無視して話かけてくるテオ。

「アリスはちゃんとここにいるよ。」

連合に私とアリスがいることがばれると少し面倒なことになるから
霊体化してるんだ」

テオの耳に口を近づけて囁くように告げる。

「そ、そういえばアリスはサーヴァントだったな、」

テオは顔を赤く染めながら私から離れた。

（この頃はよく照れたように私から離れることがあるけどなんでだ
ろ？）

霊体化しているアリスは拗ねてしまった。

私が首を傾げていると私達のやり取りを見ていたアリカ王女が微笑
ましそうにこちらを見ていた。

私はその様子を見無視してアリカ王女に話しかけた。

「はじめまして、私はテオドラ第三皇女の護衛をやらせていただい
ているありす、と言うものです。」

アリカ様、ここからは脱出したほうがいい。どうしますか？」

すぐさま真剣な表情になるアリカ王女。

「ほうお、お前がありすか、

気遣いはありがたいが私はここに残る。待っているヤツ等がいるのでな」

そう話している間にヤツ等がきたようだ。

「よう、姫さん。」

「遅いぞ。我が騎士。」

紅き翼が。

「おい姫さん、誰だそいつは」

しばらくして私達に気が付いたようにアリカ王女に聞くナギ。

「この人はヘラス帝国の第三皇女テオドラじゃ。私と交渉中に敵と一緒に捕縛されたのじゃ」

「テオでよいぞ！そしてこっちが妾の護衛のありすじゃ」

テオに紹介されたのでとりあえず自己紹介。

「紹介に与ったあります、といいます。ナギさんとは久しぶりになりますね？」

久しぶりと言ったのに驚いたのか固まっているナギ、そしてそれを興味深そうに見る詠春。

「ナギ、知り合いか？」

「いや、覚えて・・・ああ！！」

詠春！こいつは俺に氷の魔法で攻撃してきたやつだ！！」

「なんだと！」

ナギは思い出したようで杖を構える。

詠春もさすがに驚いてこちらに刀を構えている。

「思い出して貰えましたか、あの時の怪我は治りましたか？治っていないのなら私が治しますが」
私は皮肉を込めてナギに語りかける。

「てめえ！！」

これに切れたのかナギが突っ込んできた。
それを防ごうと呪文を唱えた。
しかし、

『二人ともやめるのじゃ！！』
テオとアリカの声が響き渡った。

それに私も呪文を破棄し、ナギも杖を下ろした。

「何があつたのかは知らないが二人ともやめるのじゃ、これからは協力関係になるのじゃ。仲間同士で争っても意味が無いじゃろう。」

「そりゃ、どうゆうことだ！姫さん」

「そのままの意味じゃこれからはこの者達も仲間じゃ。これは決定事項じゃ。」

「姫さんがそういうならしかたねえな」

話がついたのかこちらに向かつてくるナギ。

「さつきはすまなかつたな。てつきり敵かと思つてよ。」

案外普通にナギが謝ってきた。

「こちらもすまなかつた、これからよろしくね。」

「おう！でも前見た時はもう一人いなかったか？」

う、痛いところを突いてくる。

「あれは分身なんだよ。」

「そうか、確かにお前そっくりだったしな」

我ながらむちゃくちゃな応え。

でもそれで納得したのかナギはアリカ王女の横に戻っていく。

「アリカ、妾達も紅き翼と行動を共にしてもよいのか？」

「もちろんじゃ、お前達がいれば心強いからな」

こうして私達は紅き翼と行動を共にすることになった。

隣ではテオがさっきの件について説明しろと小突いてくる。

テオに短く説明して紅き翼に付いていきますか、

九話

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！
どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ
このジャリはよ」

「なんだ貴様、無礼であらう！」

「へっへん

生憎ヘラスの貴族にや

貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？貴様何者だ」

ついで早々ケン力を始めるテオとラカン。

仲が良いのは結構なのだが場所と時間を考えて欲しいものだ。

そういえば原作でも肩車するほどの仲だったはず。

でもこちらではそこまでではないようだ。

やはり私達と言う友達がいるからだろうか？

紅き翼のアルや詠春も呆れた様子で見守っている。

紅き翼の連中はさすがにテオことヘラス第三皇女テオドラは知って
いるようだし

私も自己紹介をしなければ。

私はアルと詠春がかたまっている所に向かう。
あちらもこっちには気がついていたようでこちらに顔を向けてくれた。

「はじめまして。私はテオドラ様の護衛をさせてもらっているありますといします。」

今後ともよろしくおねがいします。」

ペコリとお辞儀をして前に向き直るとアルは何かに勘付いたような顔。

「まさか、貴女はあのナギに勝ったと聞くありさんでしょうか？」

「ナギに勝った人物が他にいないのであればそれで間違いないでしょう。私は一度ナギに勝っていますから」

「やはり……。では黒いドレスの少女と言うのは貴女のお仲間でしょうか？」

「ナギに聞いたのでしたらそれは違います。ナギにも言いましたがアレは私の分身といえますか使い魔です。（ウソは言っていないウソは）」

「それはそれは。それほど強力な使い魔を作れる方だと思いませんでした、殆ど魔力を感じないと言うのに……」

アルが警戒の目で見てくる。
それはそうだろ。

強い使い魔が作れるということはそれだけ強い魔力があるということだ。

なのに私から一般人並にしか魔力を感じることができない。

何故なら常に魔力を遮断する障壁を私とアリスの周りに展開しているからだ。

もちろん、私には魔術の知識は殆んどないのでこれはアリスによるものだ。

しかしそんなことがアルには分かるはずもなく疑うこともなく私を強者だと思っはずだ。

「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。私はテオ様を守る者ですからテオ様に危害が及ばない限り貴方達とは敵対関係になるつもりはありませんので」

こちらの言葉を信用していいと思ったのか先ほどまでの殺気が発散していた。

「すみません、疑ってしまいました。これからよろしく願います。」

「分かっただければ大丈夫です。こちらこそよろしく願いますね。」

ホントはその読みは間違っていないんですけどね。警戒を解いたと思われるアル達から目を離しナギ達が話している所に顔を向ける。

そこでは現状の確認を行っている最中だったようだ。

「連合に帝国・・・そして我がオスティア。

世界全てが我らの敵という訳じゃな

じゃが・・・主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

以外な姫からの質問に私は呆れた。

だがナギにとっては悪くなかったようで驚くと同時に嬉しそうに見える。

「世界全てが敵。

良いではないか。

こちらの兵はたったの8人。

だが最強の8人じゃ。

ならば我等が世界を救おう。

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ。」

「・・・へ、だから俺は魔法使いだっつーのに・・・。

やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。

いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

・・・あれ？

8人って私も入ってるの？

それから私たち『紅き翼』は頭脳労働担当と肉体労働担当に分かれ

た。

頭脳派は主にアリカ、テオ、アルを主戦力に『完全なる世界』の情報を収集。

幸い、姫達のおかげで味方も徐々に増えた。

肉体派は残りの戦力で敵と判断されたものを排除していく。

私は頭脳派に所属してテオの護衛をした。

そしてラカンがいうには映画なら三部作、単行本なら十四冊分くらいは行くであろう六ヶ月の死闘の後、遂に奴らの本拠地を突き止め追い詰めた。

『墓守りの宮殿』周辺

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

いつもの服装で腕を組み、敵の拠点『墓守りの宮殿』を今までに見たことがないくらい真剣な目で睨みつけるナギ。

その言葉に同調するように軽く返すラカン。

今、私はナギ達と同じようにこの場に立っている。

非常に不本意ながら私はテオに頼まれて紅き翼の手助けをすることになった。

ホントはテオを傍で守りたかったのだがテオに頼まれてしまっ

協力しないワケにはいかない。

なので今回はアリスがテオを守っている。

アリスではなく私が戦場に出ることになったのはアリスからの試験である。

これまでテオの護衛をしながらも魔術の学習をしていた私はいつもアリスが使っている魔術の大半は習得することに成功した。

アリスが言うにはよほどのことが無い限り負けることはありえないそうだ。

「ナギ殿！

帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

「おう」

ナギのもとにやって来たのはアリアドネー総長のセラス。
返事を返すナギ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達は本丸に突入できる。

頼んだぜ。」

「ハッ、それで、あの・・・ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おお？ああ、いいぜ、それくらい。」

「そ、尊敬していました。」

頬を真っ赤に染めながら懷からセラスは紙とペンを取り出しナギに差し出した。

ナギは拍子抜けしながらもそれを受け取り慣れた手付きでサインをする。

セラスは歓喜したようすで本音をこぼす。

まったくここが戦場だつてことを忘れてしまっているのではないかと疑ってしまいそうになる光景だ。

「ナギ殿、先ほどから気になっていたのですが、その可愛い少女は一体何者なんでしょうか？」

「ああ、こいつは帝国の姫さんの護衛だ。」

こんな容姿だが実力は保障するぜ、なんたつて俺を倒したことがあるからな。」

「な！？ナギ殿をですか」

「今度やったら俺が勝つだろうけどな」

酷い言われようだ。

だが言ってることは殆ど間違つてないので否定はできないんだけど。

「まったくこんな容姿で悪かったですね。」

始めまして、テオドラ第三皇女様の護衛を勤めさしていただいておりますあります、と申します。

実力には余り自信はありませんがよろしく願います。」

「い、いえ。ナギ殿が信頼していらっしゃる方になら安心して任せ

ることができます。」

「なんだか余り私は信用されていないようだけど気にしないことにしよう。」

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。」

「決戦を遅らせることはできないのか？」

「無理ですね、私達でやるしかないでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています・・・」

『世界を無に帰す儀式』を。

世界の鍵『黄昏の姫御子』は今、彼等の手にあるのです。」

連合を説得中のガトウからの通信が入る。

「どうやらタイムリミットには間に合わなかったようだ。」

「もう戦いは始まるようだから私の力を少しでも知ってもらうことにしよう。」

「ナギ、初めの攻撃は私にさせてもらえないか？ここで私の力を知ってもらいたい。」

「ああ、いいぜ。俺も興味あるしな。」

「よし、ナギに了解は取った。」

初めての広範囲殲滅呪文だけど大丈夫なはずだ。
まずは魔力隠蔽を解かないとな。

小さく隠蔽魔術解除スペルを呟く。

『ほう』

それは誰の呟きだったか・・・

開放された魔力はナギを上回る量。

そして魔力の色は彼女のドレスの色とは正反対の黒。

それは見るだけで死を連想させる負の念を宿した暗黒だった。

いつの間にか始まっていた詠唱。

聞き取れないほどの高速で行われる聞いたことも無い詠唱。

そして出来上がっていくのはこの世界の魔法とは全く異なった異質な魔法陣。

理解できない詠唱と理解できない魔法陣が起こす現象。

それはありすの魔力を吸いそれと同じ色に発光する。

そこに居た者全ての思考を集中させたそれが今、ありすの最後の言葉と共に解き放たれる。

『涙のプール』

言葉と共に魔法陣からは大量の水が噴出した。

その勢いは敵を巻き込みながら墓守りの宮殿の周囲を多い尽くす。

そして水は完全に宮殿を多い尽くす球体となって固定されて消滅した。

しかしそれでは敵を少し削っただけに止まった。

混成部隊の多くがこれだけなのか、と肩を落とし始めた時それは起きた。

宮殿周辺にいた召喚魔が次々と消滅し始めたのだ。
それはまるでシャボン玉が弾けるかのようにだった。

最終的には水の球体に飲み込まれた範囲にいた全ての召喚魔を消し去るまで続いた。

九話（後書き）

誤字、脱字がある場合は感想に書き込んでいただけると嬉しいですよ。
感想をいただけると作者のやる気に繋がります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937u/>

白と黒の魔術師

2011年8月27日05時25分発行